

灸寺・羽栗病院訪問記

岡田靖雄

わが国で精神科医療に関する最古の施設は、京都市左京区岩倉の紫雲山大雲寺である。後三条天皇（在位一〇六八～七二）の第三皇女佳子内親王が挙動常ならぬ様になったが、大雲寺の霊泉をのみ観世音に祈願したところ、狂疾がいった、とつたえられた。この効験がつたわって精神疾患患者があつまるようになった。明治維新ごろには、周辺の何軒かの茶屋（保養所）が精神疾患患者を長期間あずかるようになっており、一種の院外家庭看護の形ができていた。明治時代に岩倉は「日本のゲール」と称されていた（ゲールはベルギーの、精神疾患患者の院外家庭看護コロニーが所在する地である）。だが、この歴史ふかい大雲寺は、それを管轄する実相院の経理破綻により一九八七年にとりこわされ、現在はその一隅にあつた閻伽の井と不動の滝とがのこるだけである。

もっとせまい治療に関係するものをさぐると、三河国羽栗の里の灸寺、光明山順因寺で応永年間に灸法と漢方薬による癲狂の治療がはじめられたことがつたえられている。この灸寺はのち羽栗病院となって現存している。つまり、ちゃんとした形でのこっているものとしては、この灸寺・羽栗病院は精神科医療に関するわが国で最古の施設となっている。

ところで、齋藤玉男（一八八〇～一九七二）は、日本医科大学の精神病学の教授および東京府立松沢病院副院長をさされ、また東京市品川区にゼームス坂病院（高村智恵子が入院し切り絵をつくったのはここである）を開設した人である。わたしは齋藤の米寿のときの回顧談を編集した（『八十八年をかえりみて―齋藤玉男先生回顧談―』、大和病院・神奈川県

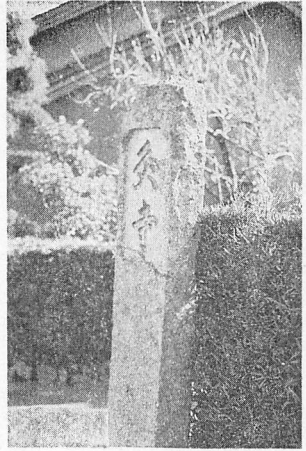


図1 灸寺の石柱

お話しをうかがうことができた。

しかも、灸寺・羽栗病院については小林靖彦『日本精神医学小史』（中外医学社・東京、一九六三年）にややくわしくのべられているだけである。^(二)この訪問記も報告に値するものとかんがえた。

まずこの所在地は、岡崎市羽栗町中二六、二七、三〇番地である。東京からいくと、東海道新幹線を豊橋駅で名古屋鉄道本線のりかえて、三五分ほどの名電山中駅（東岡崎駅から四駅手前）でおりる。この駅は無人駅で、駅前に地藏さんがずらっとならんでいる。駅周辺に人家があつまっているが、あとは農家が点在し山もちかい。この駅から徒歩一〇分南へさがった街道ぞいに病院はある。このあたりの農家は昔は平均八反に達せずまじり少なかったが、現在はほとんどの家からトヨタ関係の会社に就職している。

街道に面して羽栗病院の看板がたっているが、そこは現在は使用されていない旧外来で、そこからさらにすこしすすむと道に灸寺の石柱がたっている（図1）。そこを左にまがると寺があり、それに接して、二年前に改築された二棟の新病院がある。病院入り口には「灸寺診察室」とかいた案内板がたっている。

大和市、一九七三年）が、齋藤は晩年の何年かを羽栗病院に勤務され、またこの本には羽栗病院の栗生敏春院長も寄稿しておられる。

いつか『現代日本精神科医療史』をかく準備として、精神科医療に係る各地の史蹟（そのうちいくつかは、羽栗病院のように、現在も精神科病院として機能している）を見学してはならない。そういう意味でも、灸寺・羽栗病院は昔からわたしの関心をひいてきた。この羽栗病院を一九八八年一〇月二九日、三〇日と訪問して栗生院長のくわしい

一 粟生敏春先生の略歴

先生は一九〇八年（明治四一年）八月二八日生まれ。お訪ねしたときは満八〇歳をむかえられて間もない頃であったが、シャンとしておられた。姓の粟生は昔はアハウと仮名ふられていたが、今はアオとよんでいる。ある高等学校にはいられたが、理論的にすぎるから左翼とおもわれて（そうではなかったが）、校長に転向をせまられて、この学校をやめた。はじめ飛行機づくりになりたかったが、はやく医者になれるということで、昭和医学専門学校をえらんだ。ここでは植松七九郎先生に精神病学を、金子準二先生に病的心理学をまなび、一九三二年（昭和七年）に卒業。

同級で精神科をやりたい人がもう一人いて、その人は植松先生のほう（慶応義塾大学）にいったが、自分は金子先生に相談したところ齋藤先生に紹介された。齋藤先生は当時松沢病院副院長で東京帝国大学医学部講師（精神病学教室）を兼任していた。齋藤先生の紹介で東京帝国大学医学部精神病学教室に入局。当時は三宅鑛一教授で、いっしょの入局は柴田農武夫、廣瀬三郎、西川末男、池見猛の諸氏。そのころ医局にいたのは、鰭崎轍、林暉、金原種光、仁志川種雄、田村幸雄、村松常雄、齋藤西洋、小泉真吉、津留（のち宮城）二三子の諸氏。精神病学教室と平行して慈恵会医科大学の薬理学教室で三年間研究。医学部脳研究室は一九三六年（昭和十一年）三月一六日に落成し、同年三月三十一日に精神病学講座担任としては定年退官した三宅教授がひきつづき脳研究室主任としてのこっていた。この脳研究室に一九四一年までいた。当時の脳研究室では色素がたりず組織病理学の仕事はできず、もっぱら体力問題ということで吉益脩夫氏中心の仕事で、府中刑務所で受刑者の身体測定をしたり、麻薬中毒者対策にあたっていた。府中の帰りに青山脳病院本院（齋藤茂吉院長）によって、ここの仕事も週に二、三回手つだっていた。

一九四一年に関東軍特別演習で満州の二九師団第四野戦病院にかきされ、満州のあちこちへうごかされた。一九四三年に満州からもどってまたすぐ召集されてニューギニアにいった。そこでは熱帯マラリアにかかりもした。

一四四六年六月に帰国。父は灸寺で薬剤師兼鍼灸術師として仕事し家伝の業をうっていた。当時出征中の兄および弟の消息が不明で、具体的進路をきめかねていた。ところが一〇月になって兄・弟の戦死の公報がはいって、灸寺を自分がつくしかないときめて、一〇月末から四〇床で羽栗病院(精神科)をはじめた。間もなく一〇二床に増床し、あとはずっとこのままできた。診療は主として梶山洋一氏(一九三四年精神病学教室入局)とともにやっている。寺の住職としては二九代目で、試験にいちおうかり資格ももっている。住職としての名も敏春である。葬式があるときは院代にたのんでいる。

二 光明山順因寺の沿革

灸寺の正式の名称は光明山順因寺である。

光明山順因寺は元弘二年(一一三三年)に、もと武士であった善照法印によりはじめられた。当初天台宗に属しており、とおい山上にあるお墓のいくつかは(字もよみとれないが)、天台宗系の形をしている(いま歴代の墓は粟生先生によって本堂脇にうつされている)。善祝、善祐、善頓、日善をへて六代目照善法印が文龜三年(一一五〇三年)に蓮如上人に帰依して浄土真宗に転じ、釈正善法印と改名した(真宗の中之郷町浄妙寺派に属する)。

漢方薬および灸法による癲狂の治療は三代目善祐法印のときにはじまるといふ。応永二年(一三九四年)のころ羽栗の里に長雨があつて悪疫がはやつた。善祐はのまずくわずに本堂にこもつて阿弥陀如来にいのつていた。一五日目の夜白狐が足から血をながしてきたので、手当てしてやると山へかえつた。満願の二一日目の夜善祐の夢に、白狐がお礼にと灸の壺のかいてある巻き物をくれ、目をひらくと阿弥陀様のまえにその巻き物があつた。こうつたえられているのである(この狐は、豊橋の先の豊川稲荷とはむすびついていない)。そして、いまも、本堂脇の椋(むぐ)の木が鎮守様とよばれ、毎月一五日にお赤飯と油揚げとがここにそなえられている(真宗で狐をまつることはしないので、この行事は粟生家のものとしてひっそりとおこなわれている)。

世襲の歴代住職のなかで漢方医でもあった人がだれか、はわからない。法印の号がつけられていることからすると、かなり多くが漢方医だったのかもかもしれないと粟生先生はいわれる。昔はふるい書類もかなりあったが、祖父がはやくなくなり、父の兄弟がそれらをどこかへやってしまったらしい。反故紙につかわれたもの、三河花火の材料にされた書類もかなりあるようだ。中国からの医書などもおおくあったが、虫乾しのとぎ夕立ちにあつて、適当にほうりこんであつたものを、神田の古本屋がきて二束三文でかつていった。薬箆筒にもいろいろはいつていたが、空襲のおそれでゴチャゴチャうごかしているうちに、なくなつてしまった。でもいままも本堂内陣のしたに空襲のおそれでほうりこんだものがあり、きれいな人骨にラテン語で解剖学名をかきこんだものなどもあつた。

「最近こんなものをみつけました」と粟生先生にみせられたのは、写

真の横八〇センチ縦六〇センチほどの和紙である(図2)。印も丹波頼

徳とよめる。錦小路頼徳(一八三五〜六四)は、長州落ち七卿の一人で

(三)

ある。現在つかわれている漢方薬がこの三つの散薬のどれにあたるか

は、わからない。戦前には、「——いくつまみ、——三分の一、以下口

伝」などかいた処方もあつたが、粟生先生が戦争からかえるとそれもな

くなつていた。

灸寺の通称はいつごろからあつたのか。入り口の「灸寺」の石柱は大

正のはじめに先生の父君舜治がたてたものである。父君は薬剤師、鍼灸

術師で、家伝の羽栗散をうっていた。その効能書きには頭痛、のぼせな

ど脳神経関係のいくつかの症状があげてあつた。羽栗の名は、東京での

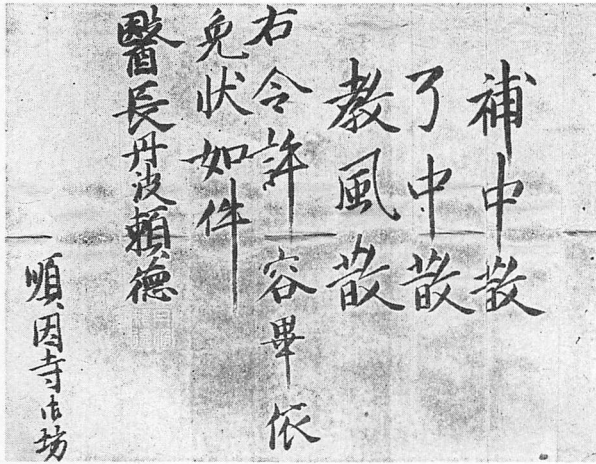


図2 丹波頼徳による免状

「巢鴨」、「松沢」とおなじような響きをもっていた。当時患者は日本中からあつまっており、岡崎から人力車でくるので、寺のまえに二、三台の人力車がとまっていたことがしばしばであった。患者を庫裏などへとめることはなかった（昔も患者を收容することはなかったらしい）。灸は有痕なので、あとは自宅で期間をさだめてやるようにしてあった。薬はあとからおくってやっていた。薬は大阪から草根木皮をおくってもらい、こちらで乾燥して薬研でつぶしていた。灸寺とはいえ、灸法および漢方薬療法は宗教的なものとはいちおう関係のない外来診療の形でおこなわれていたようである。

さて、光明山順因寺の現在の本堂は一八九一年（明治二四年）に先生の祖父のときに建て替えされたものである。山門をかねた鐘堂および庫裏はさらに一〇〇年ほどふるいらしい。壇家は五〇軒ほどで、葬式はお寺ではやらないので、庫裏をつかうのは年に数回の講のときぐらいで、庫裏は夏には入院患者のデイルームとしてつかわれている（先生の住居は庫裏に接してべつにたてられている）。「鎮守様」の椋の木は本堂の西側にあり、その樹齢は四〇〇年ぐらいかといわれている。

なお、寺ではなくて粟生家の持仏として円空刻の阿弥陀如来がある。これは専門家により円空刻と確認されたもので、円空が信州からうつるときの経路を確定するものとなったということである。

三 灸寺・羽栗病院における治療

現在の入院患者のうち八〇パーセントぐらいが分裂病患者というので、この点は一般の精神科病院とはほおなじである（図3）。外来は一日に二、三〇名であり、これは病院の規模・所在地からすると、おおいといえよう。羽栗の名がひびいていることもあって東は東京よりも東から、西は岡山あたりからも患者がきている。名古屋に病氣・うせものによいといわれる不動尊があるが、ここでは神経質ぐらいの人は自分のところで世話し、精神病となると羽栗へいけとおくってくる。父君の代からであるが、おくられてくる人を見ると、かなりよく鑑別されているようにみえる。豊川稲荷でも精神

病の人は羽栗へとおくってくる。

ここでの治療は、普通の向精神薬を基盤にしている。そして、のみそうな人に漢方薬を併用している。それは入院患者では半数ぐらいで、外来では漢方薬を希望してくる人がかなりある。この漢方薬の内容は蒼朮、当帰、柴胡、遠志、酸棗

仁、甘草、陳皮、黄耆、辰砂であったが、現在は辰砂をぬいて大黃をいれている。これらを大阪で調剤してもらっている。一日服用量は三グラムである。

灸は要求に応じてやっているが、いまはやる人がへってきて年間一〇〇名ぐらい。灸点は第一胸椎および第一二胸椎（あるいは第一腰椎）の左右二横指はなれた箇所、男では第五胸椎の左に一横指はなれた箇所、女ではおなじく右に一横指はなれた箇所、そして両足背で第四指・第五指のあいだのすこし上の箇所、と計七箇所である。有痕灸であって、はじめ一週間は毎日午前中に、その後は一週間に一回朝に点灸する。

さて、これらの効果について統計的なまとめはされていない。粟生先生は、併用のほうがよいようだ、との印象をもっておられる。しかし、はげしい状態の人にはきくかどうか。とくに維持療法法のばあい漢方薬だけのほうが頭がすっきりするという人がおおい、ということである。粟生先生の診療法は一般精神科医のそれであって、先生は一般の漢方医学をまなんではおられない。また、この漢方薬あるいは灸法について、それらの専門家による検討はまだされていないという。

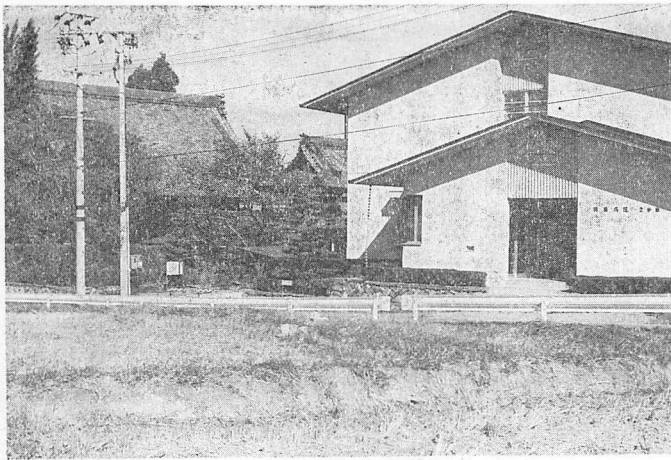


図 3 現在の羽栗病院と寺院

さて、この漢方薬および灸法の内容についてはのちに、中国古代医学を研究しておられる家本誠一先生から詳細なご教示をいただいた。

羽粟病院の漢方薬は加味帰脾湯の加減法であろう、というのが家本先生の第一の結論である。帰脾湯は、脾をおぎなう人参、白朮（これは蒼朮でもよい）、黄耆、甘草、心をおぎなう茯苓、酸棗仁、龍眼肉、遠志、血をやしない脾をおぎなう当帰、気をめぐらす木香、調味料である生姜、大棗からなり、これに肝胆の邪熱をとる柴胡、心の熱をさる山梔子がくわわって加味帰脾湯となる。上記のうち。を付したものが灸寺の処方にはいっており、そのほかの陳皮は気をめぐらす薬で木香の代用であろうし、辰砂は心の熱をさるものである。帰脾湯の適応症状は、「治思慮過度、勞傷心脾、怔忡健忘、驚悸盜汗、発熱体倦、食少不眠、或脾虚不能摂血、致血妄行及婦人経帯」で、心脾をおぎない肝胆を和するのがその狙いである。精神疾患としては抑うつ的、神経症的な人が対象となり、興奮性の状態は適応外である。

つぎに灸穴は、第一胸椎両側（大杼）、第五胸椎両側（心俞）、第一二胸椎両側（胃俞）、第一腰椎両側（三焦俞）、足背外側（胆経の壺、地五会、臨泣）のうち、大杼は脳神経への作用を期待しているのだろう。胃俞は第一胸椎両側の脾俞と効果はそうかわらない。こうしてみると、灸法も脾胃、胆肝を主たる作用目標にしており、漢方薬と同様の状態をねらっているものだろう、—これが家本先生ご教示の第二の結論である。

四 齋藤玉男先生のことほか

わたしは精神科医としての齋藤茂吉につき三〇年あまりの関心をもちつづけてきたので、身ぢかにみたこの人について粟生先生から興味ふかいお話しをうかがうことができた。三宅教授謝恩会^(四)のとき、柴田氏とならんだまえに、中折れの横のリボン^(五)を正面にかぶっている人がすわって、しきりにはなしかけてくるので、だれと知らずに「ハ」、「ハ」と返事していた。これが茂吉先生にあった最初であった、ということである。そのほかの話は、いつかかくべき『精神科医齋

藤茂吉』にゆずることにして、ここではもう一人の齋藤さん、玉男先生のことを中心にかきとめておきたい。

まずかいておかなくてはならないのは、東京帝国大学医学部精神病学教室の所在地である。教室および病室が池ノ端門近くにあった時期のあることをわたしはきいていた。ところが、『榊俣先生顕彰記念誌―東京大学医学部精神医学教室開講百年に因んで―』（榊俣先生顕彰会・東京、一九八七年）に「東京大学医学部精神医学教室略年表稿」をまとめるために、『東京大学医学部百年史』（東京大学出版会・東京、一九六七年）中の付属病院沿革によって教室所在地をたどると、南新門そばの建て物から現在の赤れんが棟にうつったようになり、疑問をのこしたまま、そのようにしるした。ところが、粟生先生にうかがうと、入局当時の精神科は不忍の池がよくみえる三階建てにあり、三階は予算の関係でつかわれず、一階の手前が外来、奥半分が病室、二階が医局および研究室であった。赤れんが棟にうつったのは一九三四年である、ということであった。つまり、池ノ端門にちかい東病室にあったことがたしかめられたのである。

齋藤玉男先生のゼームス坂病院には金沢をでた岡田という医者がつとめていたが、この人がゼームス坂病院をやめて岡崎で神経科を開業していた。さらに病院にしようとして齋藤先生に相談して岡田病院（愛知県額田郡幸田町）が開設されたのは一九五〇年ごろか。齋藤先生は東京からここへ応援にかよわれ、院長になったこともある。だがそのうち齋藤先生はここをやめることを希望されるようになり、しかも三河の地には魅力を感じておられたので、羽栗病院へきていただくことにした。そして一週間ぐらいつつ羽栗病院で過ごされるようになった。粟生先生は齋藤先生を父親がわりの家族同様に遇して、寺の書院にすんでいた。齋藤先生はすきなように患者をみたり、のこっていた漢詩の本を片端からよまれたり、庭いじりをしたりもした。病院の庭に山をつくり、それを患者たちは齋藤山とよんだ（病院改築により齋藤山はなくなった）。先生の没後に病院の庭でもしろい歩き方している患者にすれちがったとき、その人は「齋藤先生の真似をしているだ」といった。このように齋藤先生は患者たちにふかい印象をのこされた。先生はまた散歩にでてはその辺の百姓・子供たちと友達になった。「わたしはながくここをあげ、あとは病院でいそがしくなり、近所の人とは齋藤先生のほ

うがしたしくなっていたでしょう」。齋藤先生は一九四四〜六〇年とフォリア・ノイロロギカ・エト・プシヒアトリカ・ヤボニカの編集委員をしていたが、こちらでフォリアの校正をしていて、「こんなおかしなことがかいてある」と粟生先生にみせられることもあった。

先生は東京から鈍行列車で往復された。「いろんな人がくるので退屈しなくておもしろいよ」といっておられた。先生が老齢になられて、途中でなにかあつてはと家族が心配されて、齋藤先生が羽栗にくるのはやめになった。先生が羽栗にこられたのは、一九六〇年秋から一九六七年夏までのことであつた。齋藤先生は灸法については批判的であられた。^(五)

精神科においても漢方の意義が再認識されてきている昨今であるが、灸寺・羽栗病院における経験は貴重なものとかんがえて、この小文をしるした。ご教示くださった粟生敏春先生に心からのお礼をもうしあげるとともに、先生のご長寿をねがう次第である。この内容は、一九八九年二月一八日の精神科医療史研究会定例研究会および、一九九〇年一月二〇日日本医史学会月例会で報告した。定例研究会で討論してくださった小峯和茂・竹村堅次・滝口直彦・長谷川憲一・長谷川源助・原田憲一・藤原豪・吉岡真二の諸氏、月例会で司会された大滝紀雄先生およびここでご討論くださった諸氏、なかでも漢方薬・灸法の内容につきのちにもくわしいご教示をくださった家本誠一先生に、ふかく感謝したい。

注

(一) 齋藤玉男先生の生涯については、前記『八十八年をかえりみて』のほかに、岡田靖雄「齋藤玉男―超俗の精神科医―(その人たちの横顔・連載第三回)」(6号線、第6号、七五〜七九ページ、一九七七年)および松下正明「齋藤玉男―Folia Neurologica et Psychiatrica Japonica の創始者―」(臨床精神医学、第一〇巻〔第六号〕、七四三〜七五七ページ、一九八一年)にくわしい。

(二) わが国の精神科医療に関するふるい施設についてくわしいのは、呉秀三「我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設」(東京医学會創立二五年祝賀論文第二輯)および呉秀三・榎田五郎「精神病者私宅監置ノ実況及ビ其統計的觀察」の第三回掲載分(東京医学會雜誌、第三二巻〔第一二号〕、六九三〜七二〇ページ、一九一八年)中の「第四章 民間療法ノ実況」であるが、両

方とも灸寺にはふれていない。小林の記載が灸寺につきちゃんと紹介した最初のものではあろう。

(三) 東京大学医学部付属病院中央検査部長、のちに関東中央病院長をつとめられた樫田良精氏(一九一〇〜八六)は、錦小路頼徳の異母弟の孫にあたる。

(四) 齋藤茂吉については、岡田靖雄「戦前の私立精神病院長の日記から―精神科医齋藤茂吉の苦悩―」(医学史研究、第三〇号、三三〜三六ページ、一九六八年)、岡田靖雄「齋藤茂吉の肖像―ある精神病院長の苦悩―(その人たちの横顔・連載第二回)」(6第線、第五号、四六〜五九ページ、一九七七年)、および岡田靖雄『私説松沢病院史』(岩崎学術出版社、東京、一九八一年)中の随所でのべた。

(五) 『八十八年をかえりみて』四二ページで齋藤先生は「お灸は背中と足の裏のところ」とかたっておられるが、足の裏は誤りである。家本先生によれば、足の裏の湧泉は腎経の井穴で、灸寺の治療法の全体的方向とあわない。他方、足の裏の灸が精神病患者にたいしかなりひろく適用されていたらしいことは、呉「我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設」に足底の「点灸ノ結果膿潰」の写真がのっていること、またわたしが所蔵する筆写本『諸家秘法集』(一八〇五年、「毛せんの色揚」まではいって、専門の医者となりきっていないかっらしい医者の手控えであろう)に、「乱心之妙薬」として、香附子・甘草について足底の絵をかいて「此処ニ三七日灸ス」とあることから察せられる。ただしこれが真の治療をねらったものかどうか。呉は、精神病患者の「処置ニ対シテモ或ハ之ヲ制縛スルアリ或ハ点灸スルアリ(足蹠ナドニ二錢銅貨大ノ灸ヲ点ジテ飛躍ヲ防グガ如キ類ナリ)」とかく(「施設」一二九ページ)。齋藤先生はこれらについての見聞のことを混同されたのだらう。

(精神科医療史研究会)